

春日横丁ラブソディ

日報8 湯気と肌と宵の口



「ちわつす！ きりかー！ こんばんはー！」

勢いよく開いた戸の向こうには隣人かつ幼馴染の万屋よろずやみなみが、元気よく手のひらをふりあげて立っている。

千里ちさと桐香きりかは、たっぷり五秒間、声もなくその場に硬直した。

側かたわらに置いていた眼鏡をかけて、目の前を見る。

レンズ越しにはつきり見えるのは、やはりみなみである。呑気のんきで、それでいて元気のありあまった笑顔。頭の片側でまとめた髪。

筋肉のラインのうっすら浮かんだ、しなやかで細身の――

—まるはだかの、身体。

そう。

腰に手をあてた仁王立ちのみなみは、冬でも小麦色なその全身に、なにも纏まとっていない。

すっぽんぽん、というやつだ。

いや。

全裸なのはまあ、それ自体別にものすごく驚くべきことではない。なぜなら。

「うはー、さすがに寒いなあ廊下、入っていい？」

笑いながらみなみは、ぴよんと歩み入って後手に扉を閉

めた。

桐香はまだ言葉を発せないまま、眼鏡の奥で目をまたたかせる。湯船ゆぶねの湯面ゆおもてのうえで、裸の肩をいからせたまま。

ここは我が家、千里家ちさとのお風呂場。

お風呂場なので、裸なのは驚くべきことではないし、問題はない。

問題なのは。

「……っ！ 何勝手にひとんちのお風呂入ってきてんのよ！！」

じゃぼん、とお湯が散る勢いで身を乗り出して声を荒げ

た桐香に、しかしみなみはのほほんとした笑みを浮かべたままだ。

「勝手じゃないって。お父さんにちゃんと、お風呂借りていいですかーってお断りしたからさ。あ、シャワーと垢すり借りるよ？」

タイルの床に腰をおろして、垢すりに石鹼せっけんを擦りつけるみなみ。シャワーで桶にお湯をためると、ざぱあっ……と肩からかけ流して目を細める。

なにからなにまで自分の家の風呂に入ると変わらない手慣れた風情なのは、過去に幾度もみなみがうちのこの風

呂に入っているからで。

けれど。

溜息ためいきをついて、桐香は湯気に曇る天井を見上げた。

あとで、父さんもまとめて説教だ。自分に何の声掛けもなくこいつに入浴許可を出すなど、心臓に悪すぎる。

「いやあ、さっきは植木鉢と板の片付けやったからさ、重くって汗かいたんだよ。うー、気持ちいいなあ！」

傍若無人ぼうじゃくぶじん、傍らに人無なきが若ごとしなのびやかさ。

というよりこいつの場合、傍かたわらにるのが私の場合ほとんど行動に制約はかからない。

んんんー♪ という鼻歌と、しゃかしやかと垢すり
で背中を擦る音だけが、数秒間浴室の中に響き続ける。

諦めのため息をひとつついて——けれども桐香は、眼鏡の上できりりと眉をしかめた。

「みなみ」

みるみる石鹼せっけんの泡にまみれてゆく幼馴染の身体を見つつ、
硬く重い声で切り出す。

こやつの呑気のんきな気ままさ加減はまあ諦めて置いておくとして、ひとつこれは言っておかねばならない。

「んー？」

「初穂はつほにも言われてなかった？ あぐらかいて背中洗うのやめなさいよ」

「……んー？……」

こちらの顔を見あげたまま、みなみはきよとんと目を見開いた。

「初穂にも聞いたけど、なんで？」

ああもう、こいつはっ！

口を開きかけ、さりとして適切な言葉が頭に思い浮かばずに、桐香は頬ほほがかあつと熱くなるのを感じた。

「胸に手えあてて自分で考えなさいよ！ また水ぶっかけ

らりたいの!？」

「いやさー、考えはしてるんだけど……父さんとか商店街のおじさん達とか、みんなこーやって洗ってたけどなあ」

あああああ。

桃子ももこのところの藍あいさんものだけけれど、こいつもこう、ちいさいころに男湯に入ってその風習に影響されてしまったパターンか。

みなみの肩からこぼれた泡のひとかたまりが胸を伝い、ゆるやかに筋肉の凹凸おうとつの浮かんだお腹の上を通り、あぐらをかいた脚の間に滑り降りてゆく。

「いいから！ お風呂屋さんでそんな格好で身体洗うの行儀悪いんだから！」

いつのまにか湯船の中の自分のほうが姿勢を正しつつ、桐香は声を荒げた。

湯船につかっていたのと激高したのとそのほか諸々で、頬がかあつと熱い。

「いやさ、初穂にも言われたし、松の湯さんとかでは今度からちやんと座って洗うって」

背中を洗い終えた垢あかすりで二の腕と胸のあたりをさすりつつ、みなみは無邪気にやける。

「桐香とふたりのときだけにするからさ、こういうのは」
「え？」

へんな声が出た。

——ちよつと何よそれどういう、

という動転した言葉すらまだ唇が紡つむげずにいる間に、ざ
ばあ、というお湯の音がそれをうち消した。

お湯で身体を流したみなみが、つやつやぴかぴかになっ
たはだかの身体で元気よく立ちあがる。

「うはー、生き返った！」

首を後ろで腕を組み、のびをして満足げに両目をつむる

みなみ。なんだかもう、今しがたのよくわからないもの言
いを聞いたただすタイミングは、泡といっしよに流れていっ
てしまった。

「みなみ……あんたなんで直接シャワー使わないの？」
かわりにとってはなんだが、桐香は眉をひそめて率直
な疑問を口にする。

見ているとこいつは今日に限らず、「出したシャワーを手
桶に溜めて勢いよく浴びる」という珍妙な身体の流しかた
をしがちな気がする。

「いやあ、あれだよ。ざぱあ！　って浴びるの気持ちいい

じゃん」

白い歯をみせて笑うと、みなみは濡ぬれてつやややかにてかる腹筋のお腹を手のひらで叩いた。

「桶で流すなら、湯船から汲くめばいいのに」

「まだお父さんも入るかもしれないのに、お湯少なくてちやったら申し訳ないじゃん」

わけのわからない景気の良さを追求するわりに、変なところで気を使うやつである。

あいにく父さんは身体の容積的に湯船のお湯が半分になつていても溢あふれさせるので、そういう心配は無用なのだけ

れど。

「あ……っっていつても、これからお湯こぼしちやうのはぐ勘弁か。入っていい？ 桐香」

「ちよ、」

ちよつと待ちなさいよつ、と口にする暇いとまもなく。振りあげられたみなみの片足は、かかとを湯船の縁いしにのせている。

ちやぽん、という音をたててその片足が湯面ゆおもてに沈み——あれよあれよというまに、くるりと回れ右をしながらみなみはお尻を湯船に、桐香の横に滑りこませていた。

「ちよつとつ！ あ、ひやつ」

へんこな悲鳴をあげてしまった。

千里家の風呂場と湯船はそんなに大きくない。とくに湯船は真四角立方体な旧型なので、小学生の頃はともかく今のみなみと自分がふたりで入るにはかなりいっぱいはいっぱいなのである。

ふたり並んで洗い場のほうを向いて座ると、こう、どうやっても身体の片側が、肩とか腿ももとかがくつついてしまう。

その密着にみなみは特に頓着とんちやくする様子もなく、うはー♪と心地よさげな声をあげて背中を後ろの縁と壁にあずけた。

こいつは……！ と、桐香は裸の肩をいからせ、唇を横

一文字ともへの字ともMの字ともつかない珍妙ちんみょうなかたち
に引き結ぶ。

湯船に浸かったのはみなみが入ってくるほんのすこし前
だったの、まだのぼせるような長湯ではないのだけれど
……憤慨ふんがいのためか狼狽ろうばいのためか、汗ばんだ頬ほがぽうつと
火照ほってくる。

「やー、久しぶりだなあ一緒に風呂入るの」

「何言ってるの？ 正月早々二回も入ったばっかでしょう
に」

なんだか必要以上に高くとんがらせてしまった声で、桐

香は指摘する。

お正月、桃子の家に泊まりに行つたときに、みんなで松の湯さんに夕方の入浴に行つて。その翌日には羽根つきの勝負をした際に色々あつて、帰りにふたりで桃子の家のお風呂を使わせてもらったのだ。

「そつかあ。いや、でもさあ、もうひと月もたつてるんじゃない。最近松の湯さんでも会つてないし」

「しようがないでしょ。私、お店がある日は行くの遅めなんだから」

みなみの家である万屋よろずや金物店かなものてんは春日横丁のほかの店より

すこし早く、夕方は六時半の閉店だ。

土曜日などは、店の手伝いを終えたみなみがそのまま松の湯さんに行つて、帰りにタオルの入った袋をさげてお駄賃で千里食堂ちちやうに夕食を食たべにくることもある。

「お店が終おわるの待まちつててくれれば構かまわないわよ。手伝ていしない日ひだつたらそれこそ夕方ゆふがから行いけるし——」

ひとさし指ゆびを立てて説せきかけて、そこで桐香きゆうかは我われに返かえる。
なんだ。なにを私わたし、一緒いっしょに銭湯おふろ行いくためのスケジュールなんて調整ていせいしててるんだ。

「ほんと？　じゃ、金曜日あさってとかどう？」

「明後日？ 明後日だったら、手伝いないから夕方からで大丈夫だけど……」

「うーしやったあ！ 楽しみ！」

じゃぽんっと湯の音が響く勢いで、みなみが両腕を振りあげた。

結局いのように話を運ばれてしまった。みなみが相手だとんだかいつもこうなる桐香である。

いや、まあ、別に銭湯に一緒に行くのに気が向かないというわけではないのだけれど。

「そういや、桐香さあ」

自分の家の風呂に浸かっているかのように呑気のんきな様子で、
みなみが切りだした。

「桐香って、いつも正座してお風呂入ってんの？ もつと
こう、のんびりくつろいだほうがよくない？」

「——え」

そこではじめて気づく。言われた通り、湯船の中で正座
して、膝の上に折り目正しく両手を置いている自分に。

「こ、」

これはあなたが入ってきたりするから……！！

発しかけた言葉は声にはならず、桐香は真っ赤な顔で唇

だけをばくばくさせる。

そもそもこう、万屋みなみが湯船の隣に入ってきたことにより自分がしやちほこばって正座してしまったことの因果関係は、自分でも明確に説明はできず。

「別につ、今日はたまたまだわよ……！」

もはや意味をなさないやけっぱちめいた声をあげて、桐香は勢いよく姿勢を崩した。

尻餅しりもちをつくようなかたちで、湯船の後ろの壁に背中をつけた体育座りの格好になる。みなみが両腕を広げていたので、その二の腕のあたりにうなじが乗った腕枕の形に

なつてしまふ。

唇を横一文字に引き結んで、桐香は湯気に曇る自宅風呂場の天井を見あげた。

うなじの後ろにあるみなみの腕は、張りがあつて、それでいて、柔らかく。

なんだ。

なんだこれは。

一緒に湯船につかるなんてさほど珍しいことでもないのに、今日は自分の中で何か調子がおかしい。

のぼせた頬を、つう……とひとしずくの汗が伝い落ちる。

鼻で吸い込んだ息に、湯気の匂においが混じる。

桐香は横目で隣の幼馴染を見やり、

予想外の至近距離でこちらをのぞきこむみなみに、びく
んっ！ と両肩を跳ねあげた。

「なによっ……」

「いやあ」

ほろ酔いめいたくつろぎ笑顔で、みなみは息をついた。

「眼鏡、夏に買ったやつだよね。お風呂屋さんいくときだけじゃなくって、うちのお風呂入るときもしてるんだ」

「……いいじゃない別につ、うちでだってぶつかったら危

ないんだから」

唇をとがらせながら、桐香は眼鏡を正す。

外でかけているのとは異なる、濃い紅茶色のフレームのお風呂用眼鏡。商店街の時計&眼鏡屋さんである杉浦すぎうら時計店とけいてんさんで半年前に買ったものだ。

お店でお勧めすすされた通り、お風呂に入っていてなかなかレンズは曇らない。

レンズは曇らないけれど、記憶がよみがえってほつぺたがまた一段階の熱を帯びる。

そう——

これを買うことになったのは去年の八月、たまたまこいつと一緒に松の湯さんに行ったときの一件が原因であったのであり。

「そうだよねえ——桐香さ、あれから腰とかお尻とか、大丈夫？」

「つつつだつ、だいじよぶにきまつてるでしよつ!？」

からだじゅうの間接が電流で硬直したみたいに、桐香はお湯のなかでまっすぐに背筋をのびあがらせた。

あの日。

眼鏡を外して松の湯さんの浴場に入った自分は、床のま

ん真ん中に転がっていた誰かの忘れものの石鹼せっけんを踏んづけ
て、あたり一面に音が鳴り響く勢いで尻餅をついてすっ転
んでしまったのだ。

そのまま頭とかを打たなかったのだけは幸いだったが――
――不意打ちの痛さと驚きでごろんごろん転げまわってしま
ったし、みなみに抱きかかえられて脱衣所で介抱され、最
最終的に番台の珠代さんが女医さんと呼んでくれてお尻に
湿布しっぶを貼ってもらおうという、中学生としてはたいへん恥ず
かしい顛末てんまつと相成あいなった。

その翌日に杉浦時計店さんで買ったお風呂用の眼鏡を、

こうしてお風呂屋さんでも家でもかけるなり、手元に置くなりしている次第である。

「そっかあ。そうだよねえ、大事大事」

白い歯を見せて、にっかりとみなみは笑った。

いや、いいからもうちよつとこう、そんな至近距離に顔を寄せるな。あと肩に手を回すな。

桐香はあさつての方向にまなざしをさまよわせ——といえ狭い風呂場の中なのでさまよわせる先にも限界はあり、唇をへの字にして隣のみなみを見る。

——……またすこし、筋肉ついたかしらこいつ。

見かけからわかるというわけではないけれど、触れている腕や腿の肌の奥に、しっかりとした弾力が形作られている気がして。

金物店の手伝いで品物をあげおろししているのに加えて、もともと身体を動かすのが好きで暇があればランニングだの縄跳びだのをしているので、身体が引き締まっていくのは当たり前ではある。

けれども、ごつごつとはっきりしラインを主張する筋肉というわけではなく。

流線型。そんな言葉が似合う、緩やかな曲線でつくられ

た、冬なのに小麦色の、しなやかで綺麗な身体。

「きりか？」

きよとんとした声が湯面ゆおもてに響き、桐香は横目でみなみの胸元をのぞきこんでいてしまった自分に気づく。

「大丈夫？　もしかして長湯させちゃった？」

「大丈夫よ、そんなんじゃないから」

声がうわずってしまふのを懸命に抑えつつ、桐香は斜め上を向いた。

「でもまあ、そろそろあがるかしらね。みなみは頭は洗わなくていいの？」

「あー、うん、おつけーすよ。あとでまたうちでもお風呂に入るし」

またよくわからないことを言いつつ、みなみは立ちあがり——腰のあたりまで出たあたりで、再び身体を湯船に沈める。

「あ、桐香先あがつてよ」

「いいわよ、先出なさいって」

桐香は苦笑した。

事前の断りもなくひとの家の風呂に入ってきたりするわりに、みなみのやつはわりと律儀なところがある。

そのあたりの遠慮の内容は、さりとしてこちらもお見通しだ。

「私が先出るんだったら、私が使ったバスタオルは洗濯機に放り込んじゃうからね。みなみは新しいの使うのよ。いちおうお客なんだから」

う、とみなみは珍しく唇をへの字に結んだ。

中途半端な姿勢になったその腰をぴちやんと叩いて、ほら早く、と促すと、ようやくみなみは湯船の縁をまたぐ。

幾度か過去に同様のことがあって、いつもはタオル類持参でやってきたりするみなみだ。本日はおそらくほんとう

に急に決めて入ってきたのだろう。

と、いうことは。

「もしかして、まーた着替えも持ってきてないでしょあんな」

湯船から出て、桐香は戸口のタオル掛けからとったバス
タオルをみなみの肩にかける。

まあ、帰って夜に自宅でもう一度お風呂に入るとい
うのだったら、着てきたものをもう一度着て帰ってもいいの
だろうけれど。でもやっぱり、せつかく身体を洗ったのには
いてきた下着をはき直すというのももつたいない話だ。

こういうふうだから、ひとの家の風呂に入るときにはその場の勢いではなく、事前に決めて連絡しておけという話なのである。

「大丈夫だって」

ぱぱっと身体を拭いたタオルをこちらによこして、みなみは片目をつむってみせた。

「もういっかいバスタオル借りて、さっさと行ってきちやうからさ」

「やめなさい！」

思わず真顔で声がでる。

春日横丁に面する千里食堂ちさとしよくどうと万屋金物店よろずやかなものてんは、隣同士。

ふたつの家の勝手口は、ふたつの家だけが使う隙間の路地を挟んで、三メートルもない正面に向き合っている。確かに、さつと行ってきてしまうことはできる距離だ。

だが、しかし。

「みなみ——ちよつと、そこに座んなさい」

「うえ？ どしたん？ 桐香さん」

「すわれ」

「はい」

みなみは裸のまま廊下の床に、折り目正しく背筋を伸ば

して正座した。

「みなみ……あなた、何歳になった？」

お風呂用眼鏡のブリッジを中指で正して、桐香は幼馴染を睨みおろす。

「十三歳」

よろしい。

もちろん問うまでもなく、同学年で八月が誕生日のこやつ
の年齢なぞ分かってはいる。

分かってはいつつ、あえて問うたのは。

「十三歳の女の子が、バスタオル巻いただけで外歩いちや

だめなのは分かる？ 分かるわよね」

「ええー？ ……外っていったって、ひよいって玄関から玄関じゃん。ダメ？」

「だめに決まってるでしょうが馬鹿者！」

みなみの正面に正座して、鼻先に人さし指を突きつける。

「そもそも！ いままでだってだめだったんだからね！

どうしてあんたはそう、不用心にすっぱだかになるのよ！」

こいつはもう、前々から肌をあらわにすることへの抵抗
というか、恥ずかしさというか、そういうものがすっから

かんに欠落しすぎている。

いま言った、うちのお風呂に入った帰りにバスタオル巻ただけで玄関から玄関を行き来したというのも、小学生のころから直近では中学に上がった去年の夏まで平気でやっていたし。

向かいの私の部屋の窓からしか見えないとはいえ、二階の自分の部屋で風呂あがりにパンツいっちょで腰に手をあてて瓶牛乳飲んでるなんてこともざらだし、私が見てるのに気づいてそのままベランダまで出てくることもあったりするし。

夏に傘を持たないまま学校で夕立に遭い、学校用の水着に着替えて鞆を抱えて家まで——住宅街と橋と商店街を元気よく突っ走って帰ってくるなんてのも、ほんの半年前にやらかしたばかりだ。

「いい？　ほんと、外は服着て歩かなきゃいけないものなんだからね。中学生にもなって、言つて聞かされなきゃやいけないこと自体恥ずかしいことなのよ？　おわかり？」

お風呂場外の廊下ですっぱだかで膝と膝を突き合わせて正座して説教をしているというのも中学生としてどうかと思うのだが、こればかりはやむを得ない。

いちどこのあたりでちやんと行って聞かせておかないと、目の前のこの野生バカはいつか、見ず知らずの多人数の前で全裸を晒さらしてしまいう大惨事を招きそうな気がするのだ。

「んー……そうかなあ、でもさあ」

裸の胸の前に腕を組んで、馬鹿はむつかしげに眉を寄せた。

「服着てるのって、じゃまっけっていうか、窮屈だなーって思わない？」

「思わない」

桐香は即答した。

思うのは、今この場で即座にちゃんと反省しろということである。

「いいから！　ほんと、外出るときだけでも——ほかの人の前に出るときだけでも気をつけるの！」

そういうふうにはいはいすっぱだかになっていいのなんて、私の前でだけなんだからね！」

湯気を噴^ふきあげるように、廊下じゆうに響くうわずった声をはりあげて。

その声が自分の耳に届き、千里 桐香は人さし指をたてたまま静止する。

——……え？

ちよつと待った、私、今なんかへんてこなことを言つて。

三秒前の自分の声が頭の中にリフレインして、その末尾の言葉に桐香の頬は錯乱の熱を帯びる。

待て待て待てちよつと待て、いまのはそういう意味じゃなく。つて、いやいやいや、なんだ、そういう意味つてのはそもそも。

「わかった」

桐香の頭の中のぐるぐる一人問答の收拾がつくより前に、

目の前のみなみが静かな声とともにうなずいた。

はだかで正座した、淡く筋肉のラインの浮いた腿に、折り目正しく両の手をのせて。みなみらしからぬ、きりりと真面目な笑顔で。

「お風呂以外で裸になるのは、桐香さんの前でだけにします」

いや、だからちよつと待ってっば！

ああああ、ああああ、もう！